

# 多施設の糖尿病患者コホートをを用いた Diabetic Kidney Disease の実態および発症・進展因子の解明

2017/11/22 博士課程 3年 吉田唯

## 研究の背景及び目的

国内の糖尿病の罹患率は増加傾向にあり、2014年の患者調査では過去最高の316万6000人となった。合併症として腎障害を生じる患者も増加し、1998年以降は透析療法導入における原疾患の1位を占めている。

これまで糖尿病性腎症と定義されてきた腎障害の発症パターンとしては、糖尿病(型を問わず)の発症以降、5-10年後に微量アルブミン尿が出現・増加し、顕性アルブミン尿または持続蛋白尿となり、GFR(glomerular filtration rate)の低下が生じ、末期腎不全に至るという経過である。一方で、糖尿病を原疾患としていても、アルブミン尿に比してGFRの低下が先行して生じる群について、米国の研究ではアルブミン尿 $\geq 30\text{mg/gCr}$  または  $\text{GFR} < 60\text{mL/分/1.73m}^2$  の群は Diabetic Kidney Disease(DKD)と定義され、糖尿病患者の34.5%を占めることが明らかとなった<sup>1</sup>。ただ、このDKDの定義については全世界でコンセンサスが得られているものではなく、本邦で糖尿病患者全体を対象としたDKDの割合を調べた大規模な研究は存在しない。本研究にて既存の8施設のコホートを統合してレトロスペクティブな解析を行うことで、古典的糖尿病性腎症に加え、これらを含む本邦でのDKDの存在割合・発症及び進展のリスクが解明されると考えられる。また、DKDの中には早期からGFRの急速な低下を生じる一群(early decliner)があり、この群の特徴や割合、急速なGFR低下に関連する因子や腎生検上の所見も明らかにしたい。さらに、患者の血液、尿の保存検体からearly declinerを同定できるようなバイオマーカーの探索を行う。

本研究ではAMED循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業/腎疾患実用化研究事業(公募事業)より研究開発項目「糖尿病患者コホートをを用いた Diabetic Kidney Disease の実態および発症・進展因子の解明」として承認を得ている。

参考文献:<sup>1</sup>Ian H. de Boer et al. Temporal Trends in the Prevalence of Diabetic Kidney Disease in the United States. JAMA. 2011;305(24):2532-2539. 等